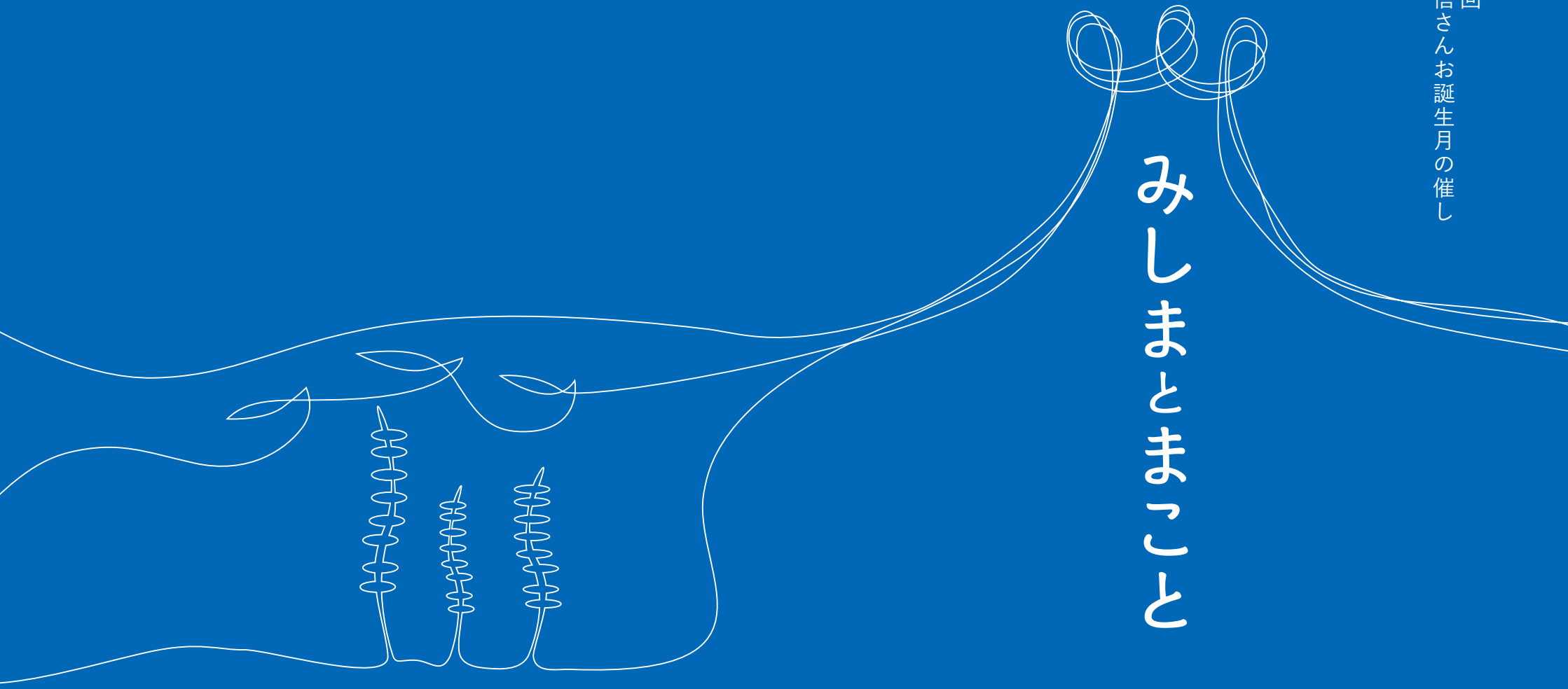
第3回
大岡信さんお誕生月の催し

みしまとまこと



詩人・大岡信と三島をめぐる
ハンドブック

ことばのたね実行委員会 編

©Keiji Iwamoto

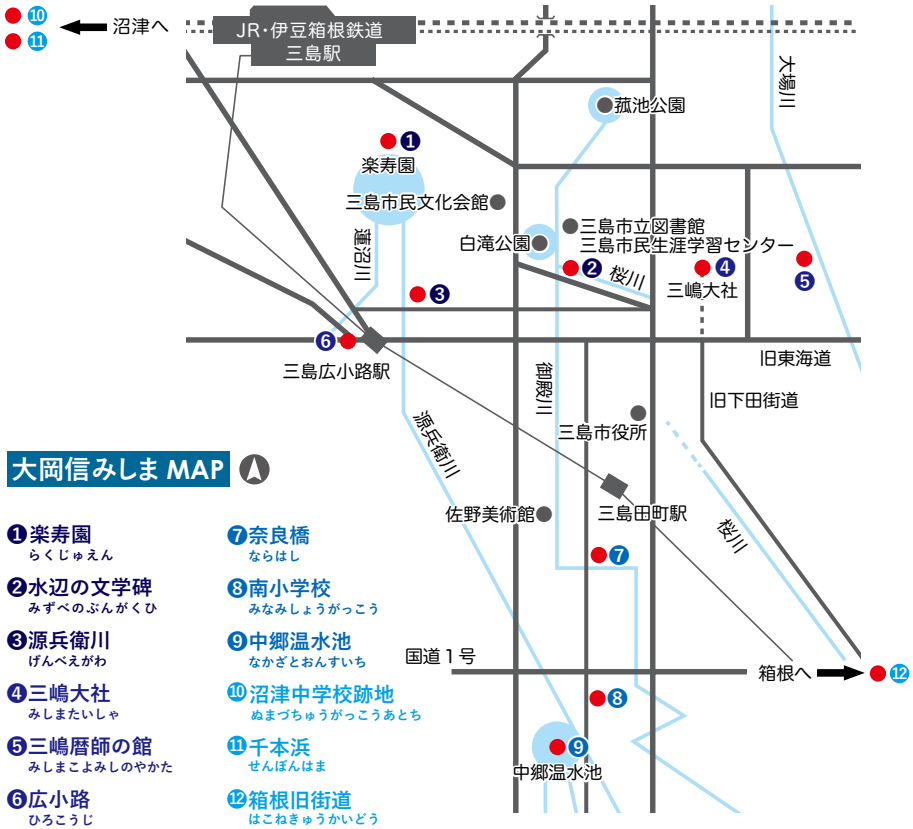
大岡 信　おおおか まこと（1931 ～ 2017）

当時の三島町、現・三島市に生まれる。三島南尋常高等小学校（卒業時は南国民学校　現・三島市立南小学校）卒業。沼津中学（現・静岡県立沼津東高等学校）時代から詩作を始め、東大国文科在学中より詩や批評が注目を集める。読売新聞社外報部に勤めた後、国内外の様々な分野の作家と親交を深める。詩作にとどまらず、美術や古典文学の批評、芸術論を活発に展開した。朝日新聞に連載した「折々のうた」は詩歌の魅力を多くの読者に届け、人気の長寿コラムとなる。また、連句から着想を得た「連詩」によって、日本の伝統的な文芸にみられる「他者に開かれた創作の場」を現代に息吹かせた。明治大学、東京芸術大学教授、日本ペンクラブ会長を務める。詩集『故郷の水へのメッセージ』で現代詩花椿賞など、多数の文学賞を受賞。文化功労者、文化勲章受章。

●故郷での主な活動

・映画「わが街三島　1977 年の証言」（監督：五所平之助 1977 年）に出演
　命の水として、文化を育む水としての大切さを伝える
・『文芸三島』創刊号から第 11 号まで詩部門選者を務め、巻頭詩を寄稿
・三島湧水群の環境保護に強い関心を持ち、講演会や寄稿などを通して市民活動に協力
・みしまプラザホテルでの定期的な講演会を経て、講演会「ふるさとで語る折々のうた」
　（主催：増進会出版社 於三島市民文化会館）を 15 年間続ける
・三島せせらぎ大使、三島市と沼津市の名誉市民

みしまとまこと を楽しむために



わたしはフジム。大岡さんゆかりのスポットめぐりにご一緒します。
さあ、出発ー！！！

このハンドブックでは、大岡信ゆかりのスポットを、大岡さんの詩やエッセイ、写真などとともにめぐります。めぐるのは、大岡さんが生まれ、少年時代を過ごした三島市市街地を中心に、沼津市と三島市郊外の 3 エリア、全 12 スポットです。それぞれ、「みしま MAP」、「ぬまづ MAP」、「はこね MAP」で紹介しています。
三島市市街地のスポットの順番は、JR 三島駅から南下していくスタイル。巻末の「大岡信みしま年表」に沿った順番とは異なりますが、その時々に大岡さんが三島で過ごした時間を想像することができると思います。

同時に、三島の水や景観の美しさにも気付くことでしょう。それは、大岡さんが愛し、地域の人々とともに守ろうとした三島の宝のひとつ。透き通った川の水底には、大岡さんの故郷への想いが堆積しているのです。
また沼津市や箱根方面に足を伸ばせば、少年から青年へ成長する大岡さんが見た風景を眼にすることできます。ぜひこのブックを携えて、出掛けてみてください！ 大岡さんの原点や、三島の街の魅力を感じていただけると嬉しいです。

地名論

水道管はうたえよ
御茶の水は流れて
鵠沼(くげぬま)に溜り
荻窪に落ち
奥入瀬(おいらせ)で輝け
サッポロ
バルパライソ
トンブクトゥーは
耳の中で
雨垂れのように延びつづけよ
奇体にも懐かしい名前をもった
すべての土地の精霊よ
時間の列柱となって
おれを包んでくれ
おお　見知らぬ土地を限りなく
数えあげることは
どうして人をこのように
音楽の房でいっぱいにするのか

燃えあがるカーテンの上で
煙が風に
形をあたえるように
名前は土地に
波動をあたえる
土地の名前はたぶん
光でできている
外国なまりがベニスといえば
しらみの混ったベッドの下で
暗い水が囁(ささや)くだけだが
おお　ヴェネーツィア
故郷を離れた赤毛の娘が
叫べば　みよ
広場の石に光が溢(あふ)れ
風は鳩を受胎する
おお
それみよ
瀬田の唐橋
雪駄(せった)のからかさ
東京は
いつも
曇り

● 地名論
『大岡信詩集』 1968年 思潮社

色々な地名が登場する、言葉遊びも含まれたユーモラスな詩。バルパライソは南米チリの、トンブクトゥーはアフリカのマリ共和国の町の名前です。水道の蛇口から飛び出した水が、地球の様々な土地を巡ってまた東京に帰ってくるという循環も、この詩の楽しい仕掛け。言葉のもつ音から情景が次々に展開し、40行という詩の間に、一瞬で時空を旅したような爽快感があります。ぜひ音読してみてほしい作品です。※詩のルビは編集部による

大岡信ゆかりのスポット❶

楽寿園

らくじゅえん
静岡県三島市一番町 19-3

小浜池（こはまいけ）の水位は
夏がいちばん多いんです！
富士山からの雪解け水が湧き出すからね。

楽寿園駅前口

みどころ

約一万年前に富士山が大噴火した時に流れ出た溶岩、その上に形成された様々な樹林、富士山からの伏流水が湧出する小浜池、これらが観察できる自然豊かな公園。園内には動物のいる広場や、郷土資料館、小松宮彰仁親王の別邸であった数寄屋造りの楽寿館があり、四季を通じて子どもから大人まで楽しめる。その一角に、大岡さんの父である歌人・大岡博の歌碑がたたずむ。亡くなる前年の歌で、背面には「大いなる月影に自己の生命観を投入した秀吟で、作者自讃の作でもあった」と大岡さんによって記されている。

写真左上：楽寿園内にある小浜池
写真左下：大岡博の歌碑「浪の秀（ほ）に　裾洗はせて　大き月
ゆらりゆらりと　遊ぶがごとし」

大岡信ゆかりのスポット❷

水辺の文学碑

みずべのぶんがくひ
静岡県三島市一番町～大宮町

水辺の文学碑

水にあやつられているみたいで
ちょっとホラーなんですけど…。
それくらい大岡さんが三島の水に
影響を受けてたってことだね！

みどころ

白滝公園から三嶋大社の間を流れる桜川沿いに、井上靖、太宰治、若山牧水など三島にゆかりのある文人たちの作品が碑となって並んでいる。その第一号碑が大岡さん。詩「故郷の水へのメッセージ」の一連目が刻まれている。文学碑をたどって川沿いを歩けば、清流に心安らぎ、愛らしい鴨や淡水魚ハヤの姿も楽しめる。全ての生物にとって大切な水の存在が、碑の言葉とともに実感されるだろう。

写真左：大岡信の文学碑「地表面の七割は水　人体の七割も水
われわれの最も深い感情も思想も　水が感じ　水が
考へてゐるにちがひない」

大岡信ゆかりのスポット❸

源兵衛川

げんべえがわ
静岡県三島市芝本町ほか

源兵衛川で遊ぶ子どもたち

みどころ

楽寿園内にある小浜池の湧水が源流で、市街地を抜け中郷温水池まで流れる農業用水路。散策ルートが整備され、美しいせせらぎの中を歩くことができる。1960年頃まで、カワバタと呼ばれる岸辺に作られた張り出しで洗い物をする姿や、天然の冷蔵庫として浮かぶブリキの箱舟（フネと呼ばれる）、風呂敷に包まれて冷やされた西瓜など、三島独特の川の景色が見られた。大岡さんの父方の、駄菓子屋を営んでいた祖母の家の近くを流れていたため、両親が教員で鍵っ子だった大岡さんは、小学校から帰るとランドセルを放り投げて祖母の家へ遊びに行き、よく魚釣りをしていた。

写真左：源兵衛川で洗濯をする女性（1938 年頃）
（三島市郷土資料館提供）

大岡さんが子どもの頃は、道路にあふれるほど水があったそう。
今だって豊かな水を楽しむ市民がたくさん。うーん、気持ち良さそう！

▶談話録 1 ――
「大岡信フォーラム」会報＊より

青々とした水草が、川にあふれるようにあります。その川は、その水草の下にかなり深く底があるわけですけど、そこにいっぱい魚が泳いでいる、というより潜んでいる。潜んでいる魚を釣り上げて、食っちゃう。海の魚ではなく川の魚ですから、好みもありますが。ばあちゃんの家に行くと、必ずおじちゃん、つまりぼくの親父の弟がぼくを川へ連れて行ってくれて、魚釣りを教えてくれました。釣れた魚を焼いて食うのが楽しみだった。

＊通巻 12 号　2003 年

▶大岡博（1907-1981）プロフィール

小説家を志すも、家庭の事情で苦学し教員となる。国文学者で歌人の窪田空穂に師事し、教職につくかたわら、短歌雑誌「菩提樹」を主宰。大岡さんが生まれた 1931 年、三島町歌（後に三島市歌）を作詞。『文芸三島』創刊時の短歌選者でもある。中学校校長、県教職員組合委員長、県児童会館初代館長、県歌人協会初代会長などの要職を務め、地域の教育と歌に情熱を注いだ。幼い時から父親の仕事にふれ、文学が身近にあった環境は詩人・大岡信に大きな影響を与えている。「徳川時代に旗本だったという、家系の誇りをかたく身に持していた人で、その雰囲気は終生かわることがなかった」と大岡さん。

左から大岡博と信（1950 年頃）
（大岡かね子氏提供）

水底吹笛（すいていすいてき）

三月幻想詩

ひようひようとふえをふかうよ
くちびるをあをくぬらしてふえをふかうよ
みなぞこにすわればすなはほろほろくづれ
ゆきなづむみづにゆれるはきんぎよぐさ
からみあふみどりをわけてつとはしる
ひめますのかげ——
ひようひようとあれらにふえをきかさうよ
みあげれば
みづのおもてにゆれゆれる
やよひのそらの　かなしさ　あをさ

しんしんとみみにはみづもしみいつて
むかしみたすゐしやうきゆうのつめたいゆめが
けふもぼくらをなかすのだが
うつすらともれてくるひにいのらうよ
がらすざいくのゆめでもいい　あたへてくれと
うしなつたむすうののぞみのはかなさが
とげられたわづかなのぞみのむなしさが
あすののぞみもむなしからうと
ふえにひそんでうたつてゐるが
ひめますのまあるいひとみをみつめながら
ひとときのみどりのゆめをすなにうつし
ひようひようとふえをふかうよ
くちびるをさあをにぬらしふえをふかうよ

● 水底吹笛
『大岡信詩集』1968 年　思潮社

全てひらがな表記の詩。ひらがなの文字の並びや、一文字一文字が一音一音として連なって、言葉が美しく響きあっています。ひらがなの形の柔らかさは、水の流れや藻がゆらめいているイメージとも重なります。そこから漂うのは、静けさや透明感、はかなさ。そして音の無い水の底に座ってひとり、水面の方を見上げながら笛を吹く少年。大岡さん 18 歳の詩作で、まるで自身の姿を投影しているようです。後に、豊かな水をたたえた三島で生まれ育ったからこそ書けた詩だと語っています。※詩のルビは編集部による

大岡信ゆかりのスポット❹

三嶋大社

みしまたいしゃ
静岡県三島市大宮町２丁目 1-5

詩「夏の訪れ」に描かれている三嶋大社の杜

大岡さんの「数々の思い出」が
何か気になりますー。
もしかして恋の話かしら？！

みどころ

伊豆国一の宮として信仰を集める古社。源頼朝が源氏再興を祈願し鎌倉幕府を開いたことで知られる。境内には天然記念物の金木犀の巨木があり、桜の名所でもある。大岡さんは中学から高校に進学するまで、大社の裏手に住んでいた。町名は宮町（現・大宮町）で、大社に代々仕える神官・神職や、建物などを維持管理する職人が住むエリア。大岡さんにとって三嶋大社は、夏の盛大な祭礼をはじめ、「数々の思い出のある場所」である。大社の杜の情景がよみこまれている作品に「夏の訪れ」がある。大岡さん16歳の詩作。

写真左：三嶋大社本殿

大岡信ゆかりのスポット❺

三嶋暦師の館

みしまこよみしのやかた
静岡県三島市大宮町２丁目 5-17

三島の歴史の長さと豊かさを感じますね。
大岡少年はここのおトイレにびっくりしたらしいです…（広くて立派で）。

三嶋暦師の館正面

みどころ

宮町には中世からの歴史を伝える家が多いが、その中に、全国に知られた三嶋暦をおよそ鎌倉時代から出版し続けた河合家がある。現在は、「三嶋暦師の館」として、河合家の屋敷を改修して関連資料を展示した施設になっている。大岡さんには河合家の血筋にあたる同級生の親友がいて、中学生時代、この家にしばしば出入りし前庭で遊んでいた。屋敷の軒下や倉の周りに大きな板がいくつもあるのを目にしながら気にもせず、大人になってから貴重な版木であったことに気がついたという。

写真左上：三嶋暦師の館沿いの道に立てられた案内
写真左下：三嶋暦…かな文字で記された日本最古の暦とされる。文字の美しさや線の繊細さが特徴

大岡信ゆかりのスポット❻

広小路

ひろこうじ
静岡県三島市広小路町付近

大岡さんの通学路だった大通りは
年々変化しています。
当時はどんな様子だったのでしょう。
思いを馳せながら歩いてみてください。

三島広小路駅前

みどころ

大岡さんは三島広小路駅と沼津駅を結ぶ路面電車（駿豆電気鉄道、通称「ちんちん電車」）で沼津中学校へ通学していた。宮町の家から三嶋大社の中を抜け、大鳥居前から旧東海道を通り、三島広小路駅まで歩いた。大社と広小路を結ぶ大通りは、宿場町の面影を残す商店街で、小学生の頃によく遊びに行った父方の祖母の家も近い。

三島広小路駅前、ちんちん電車が見える
（1963 年）
（伊豆箱根鉄道株式会社提供）

三嶋大社から広小路に向かって（1932 年）
（三島市郷土資料館提供）

▶ 詩 1 ――「夏の訪れ」より

しめつた大地はもうもうと湯気を吹き出し
青い空には真白な雲が悠々と浮んでゐる
社の杜（もり）の鳥の群が強い力に躍り狂ひ
杜の高い木々は私の耳にその声を木霊（こだま）する
ああ　なべてものが今　強烈な意識を得て
強烈な光を発散してゐる

『大岡信著作集』第三巻　1977年　青土社
※ルビは編集部による

▶談話録 2 ――
「大岡信フォーラム」会報 * より

ばあさんはぼくと同じ三島にいたんですけど、ぼくのうちには来ずに、自分一人で生きていました。場所は三島の大中島（おおなかじま）** というふうに言われている特殊な場所で、つまり遊興街ですね。夕方から、ありとあらゆる家からチントンシャンと聞こえてきます。ぼくは子どものころからそこへ行くと心が緩やかになる感じがしました。好ましい街だと感じていた。ところがそこは、普通の人は恐れて近づかないようなところ。三島の広小路というところです。

*　通巻 12 号　2003 年
**　編集部注 … 現・本町周辺

三島町奈良橋回想

掘抜き井戸が狭い小さい庭にあつた。
茗荷がちよぼちよぼ生えてゐた。
塀ぎはに白萩の　これはりつぱな群生もあつた。
ほんとにちつこい借家だつた、恥づかしいほど。

だが何てつたつて　あの透き徹る
冷たい清水。天の甘露よ　地の玉露。
なまぬるい水道水は引いてなかつた、そのかはり
縄で吊るした西瓜が、真赤に冷えて滴つた。

観世流の謡（うたひ）をうなつてゐた父ちやんも、
暗いうちからお釜をしやかしやか炊（かし）いでくれた
母ちやんも、この水が　誇りだつた。

夢の中でも　伸びた藻草がゆらゆら揺れて、
坊やはやがて　この奥の　水の都へ帰つて来るのさ、
ゆらゆらと頬笑んで　手招きしてゐた。

● 三島町奈良橋回想
『世紀の変り目にしやがみこんで』 2001年　思潮社

「奈良橋」は大岡さんが生まれて幼少期を過ごした地名。そこでの暮らしの記憶がたどられています。同時に、昭和初期の、水とともにある三島の人々の生活描写ともいえます。最終連では、実生活から離れた幻想的な世界が展開。それは、大岡少年が水を通して見ていたもうひとつの世界です。「坊や」とは作者自身で、水の都・三島は大岡さんにとっての内なる原風景であるようです。※詩のルビは編集部による

大岡信ゆかりのスポット❼

奈良橋

ならはし
静岡県三島市中田町～南田町

水の流れは今も健在です。大岡さんのご両親も誇りにしておられました。バス停もあるから見つけやすいよ。

「奈良橋」バス停

みどころ

大岡さんが中学校へ進学するまで過ごした家が現在の中田町にあった。「奈良橋」と呼ばれている地で、昭和初期に水田地帯から新興住宅地へと開発され、軍人や教員などが住んでいた。御殿川が流れ、掘り抜き井戸が各所にあった。湧水を利用した魚市場や製氷所もあった。大岡さんの家の近くを流れる御殿川の中流では、ウナギやハヤがよく釣れたという。そこに現在も架かる橋の名前が「奈良橋」で、バス停名にもなっている。

写真左上：御殿川（三島田町駅付近）で魚を捕る子どもたち
（三島ゆうすい会提供）
写真左下：「奈良橋」交差点

大岡信ゆかりのスポット❽

南小学校

みなみしょうがっこう
静岡県三島市富田町 6-1

大岡少年は、まさか自分の作文が玄関に飾られるとは思ってなかったでしょうね。

南小学校全景

みどころ

大岡さんは奈良橋の家から、南に 500m 程歩いた三島南尋常高等小学校へ通った。現在の三島市立南小学校である。学校までの通りには、母方の祖父母の家があり、兎の肉を扱っていたという「ウサギ屋」、文具屋、桶屋などの商店が点在。学校の周りは一面が水田だった。現在は国道が走り、南小学校へは交差点（標識名は「奈良橋」）にかかる歩道橋を渡ってゆく。玄関前には、卒業生・大岡さんの自筆の詩や、小学生時代の作文が飾られている。

写真上：南小学校全景（1940 年代）（小澤高好氏提供）
写真下：大岡信自筆の詩「双眸(そうぼう)　たとへば雲に
翔ぶ鳥の　わかれては逢ふ　空の道　かな」

小学 2 年生の大岡さん→
（大岡かね子氏提供）

大岡信ゆかりのスポット❾

中郷温水池

なかざとおんすいち
静岡県三島市富田町

温かい池ではなく「温めるための」池！湧水がどれだけ冷たいかが分かります。「ドンドン」って、水の音や流水に触れる身体の感覚が伝わってくるいいことばだなぁ。

「奈良橋」交差点近くに架かる「温水池橋」

みどころ

南小学校のすぐ西側にのどかな水辺が広がる。冷たい湧水を稲作用に温めるための温水池で、北から流れる源兵衛川をせき止めて 1953 年に造られた。現在は遊歩道や芝生広場が整備され、逆さ富士が見られる眺望地点に指定されている。大岡さんの小学生時代には、源兵衛川が 4 本に分岐して流れていた。清流が落ち込んで 1m 程深くなった「ドンドン」と呼ばれる遊び場があり、近所の子どもたちと集まってふんどし姿で泳いだり、魚を捕ったり、大岡さんにとって思い出深い場所。この学校裏のドンドンは、中郷温水池近くの国道 1 号あたりである。

中郷温水池から富士山をのぞむ

温水池近くの源兵衛川（1950 年代後半）
（三島市郷土資料館提供）

▶エッセイ ――「ドンドンとプール」より

みんなそこのことをドンドンといっていた。清流がそこで一段すとんと落ちこむようになっていて、水が急に深くなり――といっても水深せいぜい一メートルくらいのものだったろう――マルタやハヤが泳ぎまわっている姿が深いところに透けて見えた。(中略)

ドンドンのあたりは水田と小さな林、そして水車小屋があるきりの、三島の町の南端に近い田園だったから、ホタル狩りには絶好の場所でもあった。ホタル籠に露草といっしょに入れた何十匹ものホタルは、青くさい水の匂いをさせながら、息するように尻を光らせたり消したりした。

『人麻呂の灰　折々雑記』 1982 年　花神社

▶詩2――「螢火府」(けいがふ)より

四本(よん)の川のひとつが落ち窪む
学校裏のドンドンに、水は落ち、水は去り、
昼間なら
マルタもハヤも野の中央を縦横し、
モジリを仕掛け、オイベッサンを川底にあさる
ドンドンに、きのふの水はもうゐなかつた。

『水府　みえないまち』 1981年　思潮社

春のために

砂浜にまどろむ春を掘りおこし
おまえはそれで髪を飾る　おまえは笑う
波紋のように空に散る笑いの泡立ち
海は静かに草色の陽を温めている

おまえの手をぼくの手に
おまえのつぶてをぼくの空に　ああ
今日の空の底を流れる花びらの影

ぼくらの腕に萌え出(で)る新芽
ぼくらの視野の中心に
しぶきをあげて廻転(かいてん)する金の太陽

ぼくら　湖であり樹木であり
芝生の上の木洩れ日であり
木洩れ日のおどるおまえの髪の段丘である
ぼくら

新しい風の中でドアが開かれ
緑の影とぼくらとを呼ぶ夥(おびただ)しい手
道は柔らかい地の肌の上になまなましく
泉の中でおまえの腕は輝いている
そしてぼくらの睫毛(まつげ)の下には陽を浴びて
静かに成熟しはじめる
海と果実

● 春のために
『記憶と現在』　1956年　書肆ユリイカ

みずみずしい恋愛詩。恋人との幸せな時間、愛の喜びが、海や太陽や樹木といった自然物を通して、生き生きと表現されています。きらきらとまぶしく、恋人たちと世界との一体感が感じられます。本作は大岡さんが大学生の時に書いたもので、「海と果実」というタイトルで学内新聞に発表していました。後に結婚し妻となる恋人との出会いと、フランスの詩人・エリュアールの影響とを背景に、作風が明るく変化する転機となった重要な作品です。
※詩のルビは編集部による

大岡信ゆかりのスポット ⑩

沼津中学校跡地

ぬまづちゅうがっこうあとち
静岡県沼津市御幸町 15-1（現・沼津市民文化センター）

沼津東高等学校にある大岡信の詩碑

ひと足のばして、沼津や箱根もめぐってみませんか？
『鬼の詞』のメンバーには、それぞれ担当がありました。売り担当はイケメンが務めたとか（大岡さんではなかったらしい…）。

みどころ

大岡さんの通った旧制沼津中学校（現・静岡県立沼津東高等学校）は、現在の沼津市民文化センターの位置にあった。父・博の母校でもある（大岡博と同世代の作家・井上靖も同校出身、三島の下宿先から通学していた）。2 ～ 3 年生の夏までは戦時下の工場動員でまともに授業を受けた記憶はないという。終戦を迎え開放的な空気の中、教員と同級生数人で同人雑誌『鬼の詞（ことば）』を創刊。文学仲間と輪読や創作に熱中した。詩を書き始めたのはこの頃から。現在の沼津東高等学校の図書館前には、大岡さん揮毫の詩碑（写真上）が建てられており、詩「春のために」の一部、「ぼくらの 視野の中心に しぶきをあげて 回転する 金の太陽」が刻まれている。

写真左：校舎前にて、『鬼の詞』のメンバーと。前列左端が大岡信。（1946 年）（大岡かね子氏提供）

大岡信ゆかりのスポット ⑪

千本浜

せんぼんはま
静岡県沼津市本字千本

歌碑によじのぼろうなんて、やんちゃな坊やだったんですね。
それでも綾子お母さんのまなざしはとっても優しい。

富士山が見守る千本浜

みどころ

沼津の景勝地・千本松原を有する海岸。大岡さんは小さい頃に海水浴に連れられて、松原の松林の中にある若山牧水の歌碑によじのぼろうと頑張った記憶があるという。また、沼津は大岡さんの妻・相澤かね子（劇作家・深瀬サキ）さんが生まれ育った町。大岡さんにとって、沼津の海や浜辺は恋人のイメージと重なっていた。「春のために」をはじめ、結婚後も多くの詩を深瀬さんに捧げているが、中には「サキの沼津」という作品も。

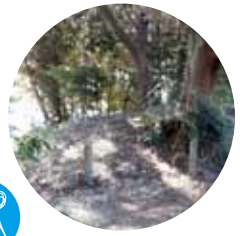
写真左上：千本浜にて幼き大岡信と母・綾子（大岡かね子氏提供）
写真左下：後に妻となる相澤かね子と(1952年頃)（大岡かね子氏提供）

大岡信ゆかりのスポット ⑫

箱根旧街道

はこねきゅうかいどう
静岡県三島市笹原新田（大岡信の記念碑）

大岡さんもアルバイトをしたとは！
なんだか親しみを感じますね。
解説をきいてみたかったなぁ。

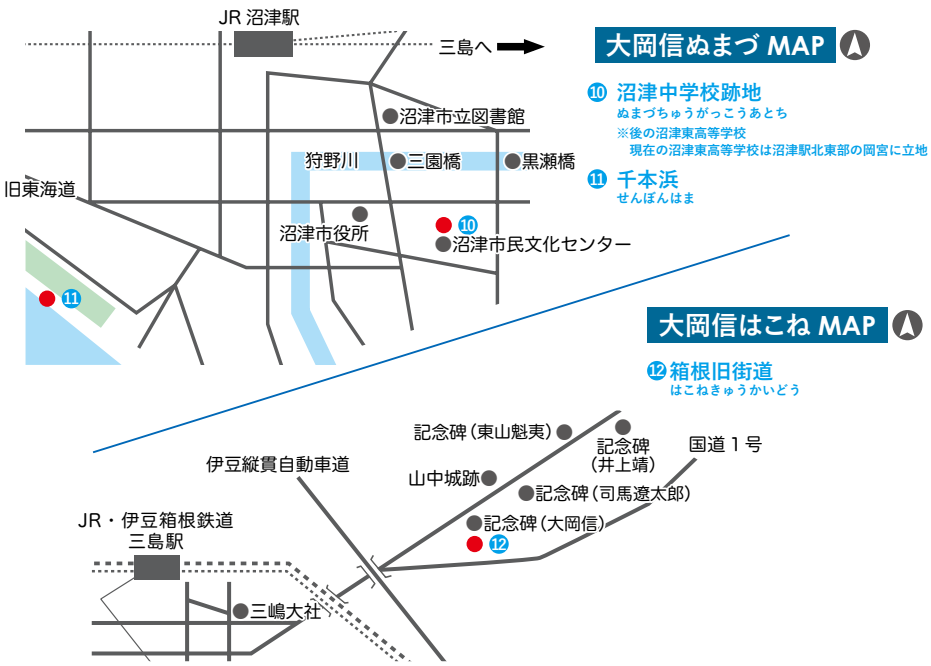


箱根旧街道

みどころ

江戸時代に整備された東海道の一部で、三島宿から箱根峠を越えて小田原宿に到る約 32 キロの道。箱根八里とも呼ばれる。その要所に設置された「オープンロード箱根八里」記念碑のひとつに、大岡さん揮毫による碑が立っている。また、大岡さんは旧制第一高等学校の学生時代、箱根ホテルの真向かいにあった「箱根関所考古館」で夏休みのアルバイトをしていた。来館者のある時だけ展示品の解説をする住み込みの仕事。戦後間もなく旅行者のほとんどいない静かな箱根で、じっくりと物事を考え、読書や詩作にふけった。大岡青年も旧街道を歩いただろうか。

写真左：街道（笹原一里塚）にある大岡信の石碑。「森の谺（こだま）を背に
此の径（みち）を　ゆく　次なる道に　出会う　ため」



人は山河を背負ふ

生まれたのが　たまたま
富士山の南側の町だつたから
ぼくにとつて　富士山は故郷の山。

昔　問はれたことがある
「君にとつて　富士山とは　何か」
相手は一瞬絶句した。

ぼくに懐かしい富士山は
この山の雪解け水が
岩盤をゆるゆるめぐつて
町の北で湧きあがる
豊かな川に　そびえてゐた。

ふるさとは
他郷の人には思ひ及ばぬ相貌(そうぼう)で
あなたの中に息づいてゐるのだ。

麓(ふもと)に住む者にとつては
富士山は　背中にずつしり重い
巨大な　暗い
清らかな　水の塊(かたま)り。

● 人は山河を背負う
『鯨の会話体』　2008年　花神社

「富士山は水だ」と答えた大岡さんの言葉は、三島に住む人々にとっては共感できるものでしょう。古来より三島の人々の暮らしと深く結びついていた湧水は、長い年月をかけてもたらされる富士山からのめぐみ。溶岩の地下を通って湧き出す水の、100 年近くの時間に思いを馳せてみましょう。大岡さんの、故郷の自然に対する感謝と畏怖の念、それらによって形成されていた自分自身の発見が伝わってきます。では、あなたにとっての富士山とは？故郷とは？ ※詩のルビは編集部による

詩人・大岡信の仕事は多岐にわたっています。詩作だけにとどまらず、古典から現代に到る文学、さらには美術や音楽、映画、演劇など、人の表現活動を「ことば」ととらえ、ジャンルを越えて、芸術全般を縦横無尽に論じています。詩集、評論、エッセイ、翻訳など著作は300冊を超え、開かれた視点から、私たちに生きた「ことば」の豊かさを伝えてくれます。

大岡信のしごと①

折々のうた

おりおりのうた

「折々のうた」は、現代の万葉集とも評される
一大アンソロジーです！

大岡信の名前が広く知られるようになった代表的な仕事が、朝日新聞の「折々のうた」。1979年から2007年まで、なんと、計6762回の連載を担当した長寿コラムです。有名無名とわず、短歌、俳句、歌謡から近現代詩、訳詩まで、古今東西の日本語で書かれた詩歌を毎日一つ取り上げ、それについての鑑賞をぴったり180字でまとめたもの。大岡さんのライフワークでした。当時はまだ、新聞の一面に文芸記事が掲載されることは珍しい時代でしたが、大岡さんによって生き生きと提示された詩歌の魅力は多くの読者を獲得し、大きな反響をよびました。現在連載中の朝日新聞コラム「折々のことば」（鷲田清一）や、読売新聞コラム「四季」（長谷川櫂）には、「折々のうた」の精神が引き継がれているといえるでしょう。

大岡信のしごと②

連詩

れんし

県では毎年秋に、静岡が誇る文化事業として
「しずおか連詩の会」を開催しています。
「連詩」は小学校の国語の教科書に掲載されているよ！

日本には、古代から共同で詩歌を作り合う伝統があります。例えば連歌は、二人以上で五七五（長句）と七七（短句）を交互につなげて創作する文芸形式。江戸時代になると、機知やユーモアに富む大衆的な連句が盛んになります。大岡さんは1970年代、この連句から着想を得て、谷川俊太郎さんら詩人仲間と一緒に、複数人で詩を数行ずつ順番につなげていく「連詩」を試みました。それは、共同で詩歌を作り合う日本独自の伝統を、個人的になってしまった現代詩の場に持ち込んでの実験でした。80年代になると、海外にて言語も文化も異なる詩人たちと積極的に連詩制作を行うようになります。個性や独創性を至上とする西洋的な価値観に対して、共同制作の形をとる連詩は衝撃的で、海外の詩人たちに大きな影響を与えました。複数人で一つのテーブルを囲み、同じ空間、時間を共有する創作の「場」において、お互いの違いを理解し深く心がつながっていく連詩は、多様性の尊重が求められる今の時代にこそ必要な形式かもしれません。

うわー！大岡さん関連の本がたくさんありますね。
市民にとっても愛されているんだなぁ。

三島市民・K氏の蔵書

大岡信のしごと③

子どもたちへ

こどもたちへ

大岡さんの仕事の中には、若い世代に向けて書かれた生き生きとした和訳や、日本語や日本文学の魅力を伝えているものがあります。その著作の中から一部を紹介！

『おふろばをそらいろにぬりたいな』
ルース・クラウス作　モーリス・センダック絵　大岡信訳　1979年　岩波書店
子どもの空想世界が、リズミカルな言葉と喜びに満ちた色彩で表現された絵本。

『にほんご』
安野光雅、谷川俊太郎、松居直との共著 1979年　福音館書店
小学校1年生の国語の教科書を、学習指導要領にとらわれず独創的に構想したもの。

『朝の頌歌（ほめうた）』
1989年　銀の鈴社
大岡さんの数ある詩の中から、子どもたちに届けたいものを3部構成で編集した選詩集。

『あなたに語る日本文学史』［新装版］
1998年　新書館
「若い人たち」へ、知識ではなく面白がってもらうことを念頭に書かれた、古代から近代までの大岡さん流・日本文学史。

『ファーブルの昆虫記』上下巻
大岡信編訳　2000年　岩波書店
全10巻のファーブルによる『昆虫記』から大岡さんが興味深い話を選び、読み易く訳したもの。

『星の林に月の船』
大岡信編　2005年　岩波書店
声に出して読むことで、その作品の美しさや魅力を楽しめる和歌や俳句を紹介。

『おとぎ草子』［新版］
2006年　岩波書店
一寸法師や浦島太郎など、昔から語られてきた7つの物語が大岡さんによって現代語訳に。

わたしは月にはいかないだろう

わたしは月にはいかないだろう
わたしは領土をもたないだろう
わたしは唄をもつだろう

飛び魚になり
あのひとを追いかけるだろう

わたしは炎と洪水になり
わたしの四季を作るだろう

わたしはわたしを脱ぎ捨てるだろう
血と汗のめぐる地球の岸に――
わたしは月にはいかないだろう

● 私は月にはいかないだろう
『透視図法―夏のための』 1972年　書肆山田

地球という大地に根ざして生き死んでいくことの豊かさを問う、そんな「地に足のついた地球賛歌」といってもいい作品です。この詩が発表されたのは 1969 年 8 月、その前月にアポロ 11 号によって人類初の月面歩行が達成されていました。世間がわき立つ中、人間本位の科学技術の進歩に鋭いまなざしを向ける大岡さんの警鐘は、現代の私たちにより響いてくるようです。この詩はミュージシャンの小室等さんが作曲し同タイトルの CD が出されているので、耳にした方もいるかもしれません。

大岡信みしま年表

1931 年	0 歳	2 月 16 日、静岡県三島町（現・三島市）に父・博、母・綾子の長男として生まれる（両親は共に教員）スポット❼
		・幼児期に千本浜で海水浴 スポット⓫
1937 年	6 歳	三島南尋常高等小学校入学（現・三島市立南小学校）スポット❽
		・学校から帰ると、広小路の祖母の家（駄菓子屋）までよく歩いた スポット❻
		・源兵衛川で釣りをして遊ぶ スポット❸
		・学校裏のドンドンで川遊びや付近で蛍狩りをする スポット❾
1941 年	10 歳	三島南尋常高等小学校→三島町立南国民学校→三島市立南国民学校と名称変更 4 月 29 日、三島市誕生（市制施行）
1943 年	12 歳	旧制沼津中学校入学（現・静岡県立沼津東高等学校）スポット❿ ※校舎は現在の岡宮ではなく御幸町にあった
		・三嶋大社裏 宮町（現・大宮町）に居住 スポット❹
		・河合家屋敷（三嶋暦師の館）でよく遊んだ スポット❺
		・三島広小路駅から " ちんちん電車 " に乗って通学 スポット❻
1946 年	15 歳	終戦から半年後、沼津中学の同級生、教員と同人誌『鬼の詞』創刊 スポット❿
1947 年	16 歳	旧制第一高等学校（現・東京大学）入学、東京・駒場寮に入る
1948 年	17 歳	夏～秋期、箱根関所考古館にてアルバイト（翌年も）スポット⓬
1950 年	19 歳	東京大学国文科に進む 後の伴侶・相澤かね子と交際始まる
		・かね子と狩野川や千本浜を歩く スポット⓫
1953 年	22 歳	読売新聞社入社
1957 年	26 歳	かね子と結婚
1958 年	27 歳	長男・玲（作家）誕生
1963 年	32 歳	長女・亜紀（画家、詩人）誕生 読売新聞社退社
1977 年	46 歳	映画「わが街三島　1977 年の証言」出演 三島市民サロンにて講演「何が詩を生み出させるか」
1979 年	48 歳	朝日新聞に「折々のうた」連載開始（～ 2007 年） 『文芸三島』（三島市）創刊
1981 年	50 歳	父・博 逝去 スポット❶
1985 年	54 歳	「オープンロード箱根八里」記念碑建立 スポット⓬
1986 年	55 歳	大岡博の歌碑建立 スポット❶
1987 年	56 歳	みしまプラザホテルにて講演「美術とそれを支えるもの」（以後、定期的に講演）
1989 年	58 歳	『文芸三島 第12 号』に「故郷の水へのメッセージ」掲載 スポット❷
1991 年	60 歳	三島ゆうすい会発足、顧問となる 三島市制 50 周年記念文化講演会「故郷の水　故郷の文化」をテーマに話す
1992 年	61 歳	沼津東高等学校に詩碑建立 スポット❿
1994 年	63 歳	三島市民文化会館にて講演「ふるさとで語る折々のうた」第 1 回 （2008 年まで毎秋開催、計 15 回）
1999 年	68 歳	「しずおか連詩の会」第 1 回（以後、毎年開催）
2001 年	70 歳	『三島ゆうすい会 10 周年記念誌』に「三島町奈良橋回想」を寄稿 スポット❼
2004 年	73 歳	三島市および沼津市名誉市民となる 水辺の文学碑建立 スポット❷
2006 年	75 歳	三島市立山田中学校、同南小学校にて日本芸術院事業「子供 夢・アート・アカデミー」の講演
2009 年	78 歳	JR 三島駅北口前に「大岡信ことば館」開館（2017 年閉館）
2017 年	86 歳	4 月 5 日、逝去
2019 年		朝日新聞社「大岡信賞」創設

編集後記 ———

大岡さんの誕生月の 2 月に（1931 年 2 月 16 日生まれ）、詩人・大岡信の仕事を伝える催しを行ってきましたが、今年度で 3 回目をむかえます。新型コロナウイルス感染症の広がりが収束をみない中、昨年度に続き人々がつどっての会の開催は難しく、ハンドブックの作成・配布という形をとりました。大岡さんについて、また、三島についての手引き書でもあり、マップでもあり、詩集でもある、そんなハンドブックになりました。

編集を終えて、大岡さんの「地名論」（本書 p3-4）よろしく、" 富士山はうたえよ　溶岩を流れて　楽寿園に湧き　源兵衛川を走り　温水池で映えよ　ドンドン　ナラハシ　センボンハマは　夢の中で藻草のようにゆらめきひかり… " とつぶやいてみたり。三島の水と大岡さんのことばは、私たちの中を循環していきます。

ことばのたね実行委員会は、2017 年 11 月の大岡信ことば館の閉館を受けて、同館がこれまで発信してきた詩人・大岡信の精神やことばの魅力を、三島の地にまかれた種としてとらえ、その種が、同館の閉館とともに消えてしまうのではなく、これからも育ち、やがて芽吹いていくことを願って発足しました。メンバーは元大岡信ことば館学芸員、三島市の学校司書や家庭文庫の運営者。三島の水によってその感性が育まれたといわれる大岡信の作品や存在を、身近に感じられるよう大人や子どもたちに伝えていく活動を行っています。

第 3 回 大岡信さんお誕生月の催し

「みしまとまこと」

詩人・大岡信と三島をめぐるハンドブック

編　　集：ことばのたね実行委員会
発 行 日：2022 年 2 月 16 日
発　　行：三島市産業文化部　文化振興課
〒 411-8666　静岡県三島市北田町 4-47
TEL: 055-983-2756
e-mail: bunka@city.mishima.shizuoka.jp
印刷協力：株式会社三島印刷